神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

村本詔司先生の思い出

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 美恵, Tamura, Mie メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1818

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

村本詔司先生の思い出

田　村　美　恵

村本先生は、私が外大に着任した次の年に赴任された。私とは同窓生であり、大先輩である。今年3月に定年退職されるまで、先生とは12年の長きにわたってご一緒させて頂いた。

授業日が異なることが多く、普段は、たまたま同じエレベーターに乗り合わせる程度で、なかなか、腰を落ち着けて会話をするなどという機会に恵まれない私にとって、ひそかな楽しみは、二週間に一回の教授会の日であった。というのも、その日は、村本先生の隣席を確保し、運が良ければ、先生といろいろとお話しすることが出来たからだ（勿論、議事進行の差し支えにならない程度で）。先生の御業績は、ユング派心理学的な自己論に始まり、現存在分析、ファウスト文学に関する深層心理学的分析、心理学と仏教や禅、哲学についての考察に至るまで、その論考の広がりは圧巻である。業績数たるや、私など足下にも及ばない。当然、先生がお持ちの教養も半端ではなく、ちょっとした合間にしてくださるエスプリの効いたお話は、日常の雑事に追われ、不勉強を常とする私にとっては貴重な「清涼剤」であった。

研究者の「お手本」のような先生であったが、一方で、偉ぶったところがまったくなく、いつもこの上なく自然体の先生であった。私のなかには、村本先生に関する「名場面」がいくつかあるのだが、その一つは、やはり教授会での一コマだ。その日は恐らく真冬のただ中であっただろう。いつものように、村本先生の隣に腰を下ろして一息つくと、見慣れぬものが目に飛び込んできた。それは先生の足下にあった。どこかで見たことがあるような気がした赤色のそれは、なんと「電気あんか」であった。

また、夏の「名場面」は、外大の正門から続くゆるやかなスロープでのことだ。授業を終わり、駐車場に向かっていた私は、ふと「ゴロゴロ」という音に気づいた。音の先には、スーツケースをひき、麦わら帽子をかぶった村本先生がいらっしゃった。よく海外の学会で講演をなさっておられることを存じていた私は、どこの学会からお帰りかと尋ねた。先生のお答えは、ノーだった。聞くところによると、ちょうど本学での講義にやって来られたところで、スーツケースの中には、そのためのレジュメやテキストが大量に詰まっているということだった。先生の授業に対する熱意に感嘆するとともに、一風変わった風貌が（大変失礼ながら）私には微笑ましかった。

本来なら、ここで終わりのはずなのだが、この話を聞いた私の愚息（当時、4，5歳だったと思う）が、絵心を刺激されたのか、大それたことに、麦わら帽子でスーツケースをひく村本先生のお姿を絵に描いて、（一度もお会いしたことがないにもかかわらず）村本先生に差し上げたいと言い出したのだ。愚息が描いた拙い絵を、下手なレポートを提出する学生宜しく、恐る恐る先生に差し出すと、先生は、少し驚きつつも、ちょっとはにかみながら「ありがとうございます」とおっしゃって下さった。この出来事は、私たち家族にとって忘れられない思い出となった。

村本先生は近年、職能／職業倫理の問題に取り組んでおられるが、それは心理臨床家としてのそれのみに限定されているわけでない。かつて外大論叢でもお書きになったように（『教職倫理への予備的考察』，2006，外大論叢第57巻6号，pp.425-444）、カウンセラーを始め、医師、弁護士、教師など、高度で特殊な知識と技能を持ち、高度な自己研鑽と個人的責任の引き受けが求められる全ての援助職に求められるものなのだ。そこでは、固有の人間関係や状況を背負った一人の人格が、これまた固有の人間関係や状況を背負った別の人格に、互いの「信頼」の下、互いの人格を最大限尊重しながら、カウンセラー―クライアント、教師―生徒などとして対峙する、そのために必要な倫理とは何か、が問題とされている。もしかすると、これはこの先、「援助職」という垣根を越えて、人と人とが関わることにおける倫理とは何かという、大きくて深い問いにもつながっていくのかもしれない。

これまでに、先生は、エイズと関連した社会福祉に関する問題や、「ヒューマニズム」「人間性」などに関する論考も数多く行っておられる。近年の職業倫理に関する研究は、これらの延長上にあるもののように感じられる。そして、先生が、幼い者や年若い者に対して時折見せられる遠慮がちな（少なくとも私にはいつもそのように感じられるのだが）姿勢もまた、先生がそうした倫理問題と常に向きあっておられるからなのかもしれない。

先生の授業には、例年、固定客とでも言うべきハードなファン層（受講生）が何人かいる。私のゼミ生も、かつてそうした固定客の一人であったが、その学生は、村本先生の授業を「どこまでも広がる世界」と形容していた。先生は本学をご退職された後も、以前の勤務校である花園大学をはじめ、いくつかの大学で教鞭を取られている。そこでも恐らく、「村本ワールド」に魅了されるファン層が少なからずいるに違いない。

先生には、ご健康に留意され、今後もますますご活躍されることを心よりお祈りいたしております。